

東日本大震災津波から9年半の行方不明者捜索 海保、警察、消防の三機関合同で海中、海岸を捜索

当署は、東日本大震災津波から9年半となった9月11日、釜石海上保安部、釜石大槌地区消防本部、岩手県警察本部嘱託警察犬指導手及び岩手県警察学校とともに、総勢83人で釜石市の平田（へいた）魚港付近における行方不明者の海中・陸上捜索を実施しました。

合同捜索開始式で、仲谷警察署長は、「震災から10年近くが経過し、捜索を巡る環境は厳しくなっているが、髪の毛一本、歯のかけらでもいいから手がかりがほしいという行方不明者家族の願いに応えるためにも、何らかの手がかり、思い出の品の発見に努めてもらいたい。」と激励しました。

海岸では、釜石警察署員12人、岩手県警察学校の教官と初任科生25人及び釜石海上保安部職員25人の計62人がレーキやスコップを使い、打ち上げられた木の枝や積もった小石を動かしたり、砂を掘り返して手がかりを探しました。

また、漁港から約200メートルの沖合では、消防本部の潜水士が海に潜って海底で名前の入った遺品や思い出の品等を探しました。

今回の捜索では、警察犬が海岸で骨のようなものを発見したことから、人骨か否かを調べたところ、鹿の骨と分かりました。

釜石出身で、中学生の時に被災した駅前交番の松下友香巡査は、「小さいころからなじみのある場所なので、行方不明者家族のため、何か一つでも手がかりを見つきたい。」と述べました。また、警察学校初任科生の小野寺大悟巡査は、「中学1年生の時に被災し、自宅が津波に流された。その時の警察官の活動に感銘を受けてこの道に進んだ。被災者である私が警察官として捜索活動に参加することで、被災地や地元の人を元気づけたい。」と決意を述べました。



捜索する釜石警察署員と警察学校初任科生